

年度別	名目國民所得 (各年度弗)	實質國民所得 (一九二九年弗)	同上年前年二對比 增減率 %
九二九	八二、八八五	八二、八八五	六、九一九
九三〇	六八、九〇一	七五、九六六	五〇、五八
九三一	五、四三一〇	七〇、九〇八	一九、七六
九三二	四〇、〇七四	五八、九三二	二、三八三
九三三	四二、四三〇	六一、三一五	二、七四〇
九三四	五〇、三四七	六四、〇五五	二、五三六
九三五	五五、八七〇	六六、五九一	二、〇三五五
九三六	六五、一六五	七六、八四八	一、七二〇
九三七	七一、一七二	七八、三五六	一、四三三
九三八	六三、六一〇	七七、一〇三	八、六五五
九三九	六九、三七八	八五、七五八	六、四〇六
九四〇	七六、〇三五	九二、一六四	一、二二二
九四一	九四、五〇〇	一〇三、三九二	一、二一八

(註、名目國民所得ハ商務省調査、實質國民所得ハ勞働統計局卸賣物價指數ニヨル。一九二九—九年迄ノ名目國民所得ハAbstract of the U.S. 1940ニ依リ、一九四〇年、四一年ハ其

後ノ公表ニヨル)
 次ニ右國民所得ノ變化ヲ齎ラサシ要因トシテ、勞働支出量ノ變化ト勞働生産性ノ變化ヲ檢討ス。

先ツ勞働支出量、從ツテ實就業者數ノ變化ハ第三表ノ如シ。

第三表 全國民經濟ノ實就業者數ノ變化(單位千人)

年 度	實 就 業 者 數	前年ニ比シ増減實數	増 減 率 %
一九一〇	三八一六七	(+) 一九三	〇・五
一九一一	三八三六〇	(+) 一〇八五	二・八
一九一二	三八四四五	(+) 四三七	一・一
一九一三	三九八八二	(+) 一〇三四	二・五
一九一四	三八八四八	(+) 一、二五八	三・二
一九一五	四〇、一〇六	(+) 一、二五八	三・二

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
三	二	二	二	二	二	二	二	二	一	一	一	一
〇	八	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七

四	四	四	四	四	四	四	四	三	四	四	四	四
三	三	二	二	二	一	三	〇	九	二	二	三	二
九	四	九	四	四	八	五	六	五	八	七	〇	二
〇	五	四	三	一	二	四	二	〇	〇	六	一	〇
〇	五	三	三	八	六	四	三	八	九	六	六	六

〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四	五	五	一	五	九	二	一	三	一	一	八	二
〇	〇	一	〇	一	四	六	一	〇	四	六	一	〇
二	二	〇	五	二	五	二	四	一	三	五	〇	〇
五	二	〇	五	二	八	二	四	一	三	五	〇	〇

〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
八	一	一	〇	一	三	六	二	七	〇	〇	一	五
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四	一	二	三	四	三	五	八	七	一	三	二	二
四	七	〇	五	二	七	五	二	一	〇	八	〇	四

一九三一	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四一
四〇、九〇〇	三七、五〇〇	三七、五〇〇	三九、七〇〇	四〇、三〇〇	四四、八六八	四六、五六〇	四四、二六六	四五、一六九	四六、九八〇	五一、〇〇〇
〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓
三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	二、二〇〇	六、〇〇〇	四、五六八	一、六九二	二、二九四	九、〇〇三	一、八一一	四、〇二〇
〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓	〓
六・八三	八・三	〇	五・八七	一・五	一・三三	三・七七	四・九三	二・〇三	四・〇九	八・五六

註
 一九一〇—二八年ハ
 Recent Economic Changesニ據ル

一九二九—三五年ハ
 National Industrial Conference Board

ノ調査

一九三六—三八年ハ推定

一九三九一四〇年 National Industrial Conference Board

一九四一年ハ推定

次ニ第一表及第二表ノ「米國國民所得ノ變化」ニ於ケル實質國民所得ノ増減率カラ第三表ノ實就業者數（勞働支出量）ノ増減率ヲ差引ケバ、勞働生産性ノ増減率ガ得ラル。即チ第四表ノ如シ

第四表

就業者増減率ノ實質國民所得増減率ニ對スル比較

年 度	實質國民所得ノ前年ニ對スル増減率%	就業者ノ前年ニ對スル増減率%	勞働生産性ノ前年ニ對スル増減率%
一九一一年	(+) 三・五〇	(+) 〇・五一	(+) 二・九九
一九一二年	(+) 〇・二三	(+) 二・八三	(+) 一・四〇
一九一三年	(+) 三・九五	(+) 一・一一	(+) 二・八四
一九一四年	(-) 二・五八	(-) 二・五九	(+) 〇・〇一
一九一五年	(+) 六・三五	(+) 三・二四	(+) 三・一一
一九一六年	(+) 七・三四	(+) 五・二四	(+) 二・一〇
一九一七年	(-) 八・四六	(+) 一・九二	(-) 一・〇三

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九
 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二
 九 九 八 七 六 五 四 三 二 一 〇 九 八

(+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+)
 二 〇 〇 二 五 〇 〇 五 三 七 三 三

 七 一 一 六 一 二 二 八 七 八 七 五
 八 八 三 二 九 三 八 五 五 三 四 一

(+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+)
 一 一 〇 一 三 六 二 七 〇 〇 〇

 一 二 〇 四 三 五 八 七 一 三 二
 七 〇 四 二 七 五 二 一 〇 八 〇

(+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+) (+)
 一 一 二 三 三 三 一 一 七 四 三

 三 三 五 七 六 七 〇 四 九 一 五
 五 三 八 七 〇 三 三 六 三 二 一

加率ノ内、幾許カ勞働支出量ノ増加ニ起因シ、幾許カ勞働生産性ノ増加
 次ニ第四表ヲ基礎トシ、一定期間内ニ於ケル實質國民所得ノ年平均増

一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五	一九三六	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四一
門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
八・三五	六・六六	六・八九	四・〇四	四・四七	三・九六	五・四〇	一・八五	一・二五	七・四七	二・一八
門	門	門		門	門	門	門	門	門	門
八・三九	六・八三	八・三一		五・八七	一・五一	一・三三	四・九三	二・〇三	四・〇〇	八・五六
門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
〇・〇四	〇・一七	八・五八	四・〇四	一・四〇	二・四五	四・〇七	一・五八	三・二〇	三・四七	三・六二

ニ依ルカヲ檢討スルニ、第五表ノ如シ。

第五表 國民所得變遷對スル諸原因ノ量的比重ノ測定

比較時期	實質國民所得		上記増加ノ原因		實質國民所得増加ニ對スルト記兩
	年平均増加率	加ニヨル分	加ニヨル分	勞働生産性増加	
自一九一〇年 至一九一九年	三・三一%	一・三五%	一・九六%	四〇・七九%	五九・二一%
自一九一九年 至一九二九年	四・三〇%	一・三一%	三・〇九%	二八・一四%	七一・八六%
自一九二九年 至一九四一年	二・〇六%	〇・五四%	一・五二%	二六・二一%	七三・七九%

右表ニ關聯シ注意スベキ點左ノ如シ。
 (一) 一九二九年以前ノ趨勢ハ

- イ、實質的國民所得年平均増加率……………三・三乃至四・三%
 - ロ、勞働支出量年平均増加率……………一・二乃至一・三%
 - ハ、勞働生産性年平均増加率……………二乃至三%
- 即チ勞働生産性ハ一九二〇年代ハ著シク増大セリ。右ハ主

トシテ同時代ニ生産設備ノ増強ガ活潑ニ行ハレ、而カモ操業率高カリシ
爲ナリ。労働生産性ハ一般ニ向上スル趨勢ニアリ、國民所得増大ニ對ス
ル労働生産性増加ノ役割ハ次第ニ増大ヤルコトヲ示ス。
曰一九二九年―四一年ノ實質國民所得ノ年平均増加率ガ一九二九年以前
ヨリ著シク低キハ、一九三〇年代ノ不況ニヨリ、生産設備ノ改良増加停
滯シ、且ツ労働力ヲ多分ニ遊休ヤシ、置キシ結果ナリ。

三、第一次世界大戦ノ体験

第一次大戦下ニ於ケル米國ノ實質國民所得ノ變化竝ビニソノ變化ノ二大要因ノ關係左ノ如シ。

第六表 前大戦下ニ於ケル米國實質國民所得増加ニ對スル二

二要因ノ比重

年度別	實質國民所得	上記兩原因ノ比重	
		労働支出量増加 ニ對スル分	労働生産性増加 ニ對スル分
一九一五年	(+6.3%)	(+3.2%)	(+3.1%)
一九一六年	(+7.3%)	(+5.2%)	(+2.1%)
一九一七年	(+8.4%)	(+1.9%)	(+6.5%)
一九一八年	(+3.5%)	(+0.2%)	(+3.3%)

右表ヨリ明ナル如ク、前大戦ノ特徴ハ、中立時代タル一九一五、一六ノ兩年ハ實質國民所得ハ著シク増加サルモ、參戰下ノ一九一七、一八ノ兩年ハ著シク減退サルコトナリ。右ハ戰前一三年迄大体「フル」ニ近キ就業ト操業ガ行ハレ居リシ爲、一九一四年ノ遊休勞働力竝ビニ生産設備ハ

僅少ニシテ、爲ニ一九一五年ノ初頭ヨリノ急激ナ生産擴充ノ結果、既ニ一九一六年ニハ完全雇傭状態ニ達セリ。然ルニ拘ラズ一九一七年ニ至リテモ尙ホ生産擴充ノ爲無理ニ多少就業労働者數ノ増加（労働支出量増加一・九二%）ヲ強行セルト、他方相當規模ノ兵力動員（平均七〇萬人動員）ヲ行ハサル結果、不可避的ニ老幼婦女子層ヨリ不足労働力ノ補填ヲ行ヒ、爲ニ労働ノ質ノ低下ヲ示セリ。翌一八年ニ於テハ更ニ大規模ナ兵力動員（平均二百五十萬人見當、最モ多ク動員セラレシ時ハ四百二十八萬人）ヲ行ヒシ結果、就業労働者數ハ逆ニ減少（労働支出量〇・二%減）サルノミナラズ、労働ノ質モ亦低下セリ。

斯ク一九一七、一八ノ兩年ハ労働支出量増加ノ限界ニ達シ、コレニ伴ヒ労働生産性中ノ第一ノ要因タル労働ノ質ノ低下ガ起リシ外、更ニ第二ノ要因タル労働配分ノ構造變化、第三ノ要因タル生産設備ノ變化ニモ混亂ヲ來セリ。即チ労働力ノ平和産業ヨリ軍需産業ヘノ配分ノ再編成過程ニ混亂起リ、殊ニ高賃銀引拔キ移動ヨリ労働市場混亂セリ。一方生産設

備ノ面ニ於テハ、前大戰ハ生産ノ特殊の分化、大體生産制ヲ進展ヤシ、非能率工場ノ廢棄ト近代化ヲ促進ヤシ、又相當規模ノ生産設備ノ新增設ガ行ハレ、コレ等生産設備ノ改装、新增設ハ、一應勞働生産性ヲ増加ヤシム可キ原因タル筈ナリ。然ルニ拘ラズ實際ハ、第一次世界大戰下ノ生産設備ヘノ新投資ガ急激ニ増大ヤルハ一九一七年ニ入リテヨリデアリ參戰第一年度ハ新設備ノ著工ニ止マルモノ多ク、第二年ニ入リ、休戰ニ至ルモ充分ニ活動ヲ開始シ得ザリシモノ多ク。又大戰下ノ生産設備ノ改装及ビ新增設ハ主トシテ直接ノ軍需産業ヲ中心ニ行ハレ、他方コレニ比例シ基礎産業ノ擴張行ハレザリシ爲、勞働力涸渴ノ外ニ原料動力ノ不足現ハレ、ソノ結果生産設備ノ改装、新增設ハ必ズシモ生産能率向上ノ原因タリ得ズ、斯クテ米參戰以後勞働ノ生産性ハ左表ノ示ス如ク低下シ、實質國民所得ノ減少、從ツテ生産力ノ減少ヲ來セリ。

四、今次大戰下ノ米國生産力ノ推移ト今後ノ見透

第二次世界大戰ノ勃發ヤシ一九三九年ヨリ米ノ參戰スルニ至リシ一九四一年末迄ノ米國國民所得ノ變化ハ、既ニ第二表ニ示ヤルガ、再度コレヲ掲グレバ

年度別	各國民所得 (各年度弗)	自國國民所得 (一九二九年弗)	同上ノ前年ニ對比ヤル増減率%
一九三九年	六九、三七八	八五、七五八	(+) 八、六五五
一九四〇年	七六、〇三五	九二、一六四	(+) 六、二四〇六
一九四一年	九四、五〇〇	一〇三、三九二	(+) 一、二二八

右ノ如ク一九三九年ヨリ一九四一年迄ハ生産高著シク上昇シ居ルモ、果シテ一九四二年以降ニ於テモ依然生産力ノ増加繼續スルヤ否ヤ、特ニソノ最高限度、頭打ノ状態ニ何時到達スルヤガ検討ノ中心目的ナリ。

第一期 中立時代

先ツ今次大戰下ニ於ケル米ノ中立時代ノ生産力上昇ノ跡ヲ願ミ、コレ

ニコツテ一九四一年十二月參戰當時ノ國民生産ノ一般的状态ヲ檢討スルノ要アリ。

一九三九年九月ヨリ一九四一年十二月迄ノ中立時代ハ、兵員ノ數モ軍事費ノ支出モ累進的ニ増加サルモ、參戰國ニ比スレバ末ダ規模少ニシテ生産活動ハ主トシテ民主主義國陣營ヘノ物資輸出激増ヲ中心ニ活潑化ヤルモノニシテ、コノ間ノ事情ハ前大戦ニ於ケル一九一五、一六年ノ中立時代ノ輸出「ブーム」ニヨル生産ノ急増ニ似タル所アリ。

然レドモ前大戦ト今次大戦ノ當初ニ於ケル國民生産ノ地盤ニ著シキ差異アリ。即チ前大戦ニアツテハ、戦前ノ國民生産ハ概シテ極メテ順調ト發展ヲ遂ゲ、勞働力ノ就業率極メテ高度ニシテ、完全雇傭状態ニ近カリキ。コレガ爲生産ノ擴張ニ伴ヒ一九一六年ニハ既ニ完全雇傭状態ニ入り一九一七年以降兵力動員ノ行ハルルニ及ビ、勞働力調達ニ困難ヲ來シ、生産力ノ上昇ヲ阻止スルニ至レリ。

今次大戦ノ勃發前ノ米國經濟事情ハコレト異ナリ、一九二九年ノ恐慌

以來、不況ニシテ、勞働力ハ多年ニ涉リ一千万人程ノ遊休アリ、而カモ生産設備ノ擴大ハ長期ニ涉リ放棄サレアリシヲ以ツテ、生産設備ニ對シ勞働力ハ益々過剩ナリキ。更ニ生産設備ソノモノモ二〇乃至五〇%ノ高度ノ操業停止ヲ行ヒ居レリ。

斯ノ如キ地盤ノトニ開始サル一九三九年以降ノ米國生産力ノ擴充ガ、前大戦當時ヨリ生産力上昇率ガ急源(實質國民所得前年比増加率一九一五年六%、一九一六年七%ナルニ、一九三九年一・〇二%、四〇年七・〇五%、四一年一・二〇二%)ナルト共ニ、前大戦ノ如ク急激ニ完全雇傭状態ニ達セザリシハ當然ナリ。斯カル生産力ノ急激ナル増加ハ單ニ勞働支出量ノ増加ニヨルノミナラズ、更ニ勞働生産性ノ急激ニ増加ニヨルモノナリ。右ノ關係ハ第七表ニヨリ明ラカク、勞働支出量増加ハ一九三九年二%、四〇年四%、四一年八・五%ニシテ前大戦ノ一九一五年三・二四年、一六年五・二四%、一六年五・二四%(第六表参照)ニ比較シ大差ナキニ、勞働生産性増加ハ三九年九・二%、四〇年三・五%、四一

年三・七%ニシテ、前大戰ノ一六年三・一%、一七年二・一%ニ較ベ遙カニ高シ。

第七表 今次大戰中立時代ニ於ケル米國實質國民所得増加ニ對スルニ要因ノ比重

年度別	實質國民所得 前年比増加率	上記増加ノ原因		
		勞働支出量増加ニヨレル分	勞働生産性増加ニヨレル分	上記兩原因ノ比重
一九三九年	(+)一・二%	(+)二・〇%	(+)九・二%	一八%
一九四〇年	(+)七・五%	(+)四・〇%	(+)三・五%	五三%
一九四一年	(+)二二・二%	(+)八・五%	(+)三・七%	七〇%

次ニ前大戰ニアツテハ、一九一四年ニ對シ、一五、一六ノ兩年度合計八・四%ノ勞働支出量増加ニヨツテ完全雇傭ニ達サルモ、今次大戰ニアツテハ、一九三九年ヨリ四一年迄ニ合計一四・五%ノ勞働支出量増加ニモ拘ラズ、末ダ完全雇傭ニ達ヤズ。即チ米國公共事業局ノ發表ニ

コレバ一九四一年末ノ失業者ハ三百八十萬人ト稱ヤラル。

今次大戦ニ於テ前大戦初期ト同様ニ、急速ニ完全雇傭状態ニ達ヤザリシ理由ハ、

一、多年ノ不況ニヨリ多数ノ遊休勞働力ヲ全部吸收スルニハ、既設生産設備ガ不足乃至舊式化シ居リシコト。

二、急激ニ増産ノ要アル軍需生産諸産業、特ニ武器生産設備ハ絶對的ニ不足ニシテ、急速ニ新增設ヲ開始セルモ未ダ完成スルニ至ラザリシコト

三、平和産業ノ生産縮少ニヨリ遊休勞働力が發生シ、コレガ軍需生産設備不足ニヨリ未ダ吸收サレルニ至ラザリシコト

斯ク未ダ完全雇傭ニ達ヤザル状態ニ於テ、一九四一年十二月米國ハ参戰ヤリ。從ツテ當時ニ於ケル米國國民生産ノ一般的狀況ヨリシテ、一九四二年ニ於テハ、

勞働力追加供出ニ未ダ相當豫裕ヲ持チ居リシコト

一 軍需産業生産施設ノ新增設ハ一部完成シ又ハ完成ニ近ツキツツアリシ

コト

三 平時生産ヨリ戰時生産ヘノ轉換ガ急速ニ進行シツツアリシコト

等ノ理由ニヨリ、國民生産ノ生産額ハ前年ニ引續キ末ダ上昇ノ可能性ヲ多大ニ保有セリ。

然レドモ一方ニ於テ米國ハ既ニ參戰シ、兵力動員ヲ本格的ニ開始スル必要ヲ生ジ、動員ノ規模如何ニヨツテ勞働力調達ハ量的質的ニ困難化シコレガ國民生産増強ノ制約的條件タラントスル可能性ヲ持ツニ至レリ。

第二期 參戰以後

一九四二年度國民所得ノ推定

以トノ如キ前提ノ下ニ、次ニ一九四二年ノ國民所得ヲ測定ヤンゴレガ爲國民所得變化ノ二大要因タル勞働支出量及ビ勞働生産性ニ就キ檢討スルヲ要ス。

〔勞働支出量

勞働統計局ノ調査ニコレハ、一九四二年末ノ勞働配置豫定左ノ如シ。
 第八表 大戦下ノ勞働配置ノ變化（單位千人）

	一九四一年末	一九四二年末	一九四三年末
一、國防産業	六、九〇〇	一五、〇〇〇	二〇、〇〇〇
二、非國防産業	四四、四〇〇	三五、八〇〇	三三、三〇〇
三、失業者	三、八〇〇	二、四〇〇	?
四、兵員	二、一〇〇	四、二〇〇	九、〇〇〇
五、使用シ得ベキ勞働力總計（一、二、三、四）	五七、二〇〇	五七、四〇〇	六二、三〇〇
六、實際就業者（一、二）	五一、三〇〇	五〇、八〇〇	五三、三〇〇

國民生産性ヲ規定トスルモノハ、右ノ内實際就業者數ナリ。一九四一年ノ實際就業者數ノ平均ハ五千百萬人見當ト推定サル。コレニ對シ一九四二年ニアツテハ、兵員ガ同年末迄ニ順次召集サルモノナルガ故、一九四二年ノ實際就業者數平均ハ、右表ニ示ス年末ノ五千八十萬人ヨリ稍々多シト推定サル。右表推定ハ一九四二年二月ニ試ミラレタルモノナル

ガ、ソノ後ノ諸情報ニヨルモ、實際就業者ハ一九四二年上半期ニ於テハ五千萬乃至五千百萬人ノ間ニアルモノノ如ク、結局一九四二年平均勞働支出量ハ一九四一年平均ト同様ナルカ、乃至ハ若干増加スルモノハ一％程度ト推定サル。次ニ四二年ニ右程度ノ勞働支出ニヨリ果シテ完全雇傭ニ達スルヤ否ヤヲ檢討サン。

先ヅ通常ノ手段ニヨリ新々ニ動員可能ナルモノトシテハ、失業者竝ビニ新規學校卒業者等アリ。一九四一年末失業者ハ八表ニヨリ三百八十萬ナレド、四一年中平均ノ失業者ハ約四百五十萬見當ト推定サル。然レドモ右失業者中百五十萬乃至二百萬人ハ機能的失業者、浮浪者等ニシテ、實際動員シ得ル失業者ハ三百萬乃至二百五十萬人ナリ。コレニ對シ新規學校卒業者等ニシテ勞働戦線ニ加ハル者ハ五十萬人見當ナリ。從ツテ新々ニ動員可能ナル者ハ合計三百五十萬乃至三百萬人ナリ。

然ルニ他方四二年中ニ兵員トシテ新々ニ召集ヤラルル者ハ、一九四一年末兵員二百十萬ナルニ對シ、四二年末ハ四百二十萬乃至五百萬人ノ豫

定ナルヲ以テ、差引キ二百十萬乃至二百九十萬人ナリ。

斯ク新々ニ動員可能ナ勞働人口數三百五十萬乃至三百萬人ニ對シ、兵員ヘ、召集者二百十萬乃至二百九十萬ナルヲ以ツテ、結局實際就業者トシテ附加シ得ル者ハ多ク見テ百四十萬、少ク見レバ十萬人程度ニトドマル。

ソレ故四二年ニ四百二十萬乃至五百萬人ノ兵力動員ヲ行ヒ乍ラ、而カモ勞働支出計四一年ト同様乃至若干ノ増加(一%乃至三%)ヲ行ハントヤバ、完全雇俯狀態ニ達シ、勞働力調達ハ著シク困難化スルニ至ル可シ一九四二年後半期ニ入リ、勞働力不足ノ情報ガ傳ヘラルルハ之ガ爲ナリ右勞働力ノ量的不足ヲ補充スル方法トシテハ(一)徵用ト(二)勞働時間ノ延長トアリ。

先ツ(一)ノ方法トシテ、一九四二年七月三十一日米大統領ハ「米國軍需工業ノ勞働力調達ノ爲十八歳ヨリ六十五歳迄ノ男女六百萬人、内男子百八萬、女子四百二十萬ノ動員計畫ヲ樹立シ、實施準備中」ト聲明シ、更ニ

十月十二月、「爐邊談話」ニテ再度勞働力補充ニ徵用制ノ採用ヲ提案セ
ル。

(註)

註「一、農場竝ビニ工場ニ於ケル勞働力補充ノ爲、新夕ニ徵用法案提出
ノ要アリ」

二、軍需品増産ヲ期ス爲工場勞働者ノ移動ヲ禁止シ、各工場ガ相互
ニ勞働者ヲ「盜ム」コトヲ禁ズ要アリ

三、徵用適齡ノ勞働者ガ農場竝ビニ工場ヨリ引揚ル結果、男女兒童
ヲ使用スルニ至ルヤモ知レズ

四、各州ノ教育當局ニ對シ、中學校生徒ヲ各學期中乃至休暇ヲサキ
農場竝ビニ軍需工場ニ働カサルヤウ指令ザリ

五、米國民ノ一部ニハ婦人ヲ使用スルヲ嫌ヒ、或ハ「ネグロ」ヲ雇
フコトヲ忌ミ乃至ハ老人ヲ使フコトヲ嫌フモノアルモ、米國ハ
今ヤ斯カル偏見ニ捉ハレ居ル豫裕ナシ。

「ノ勞法トシテノ勞働時間ノ延長ニ就キテハ、「ルーズベルト」ハ參戰直後一週七日勞働制ヲ唱ヘタルモ、去ル十月六日ニハ民間ノ航空關係技術者竝ビニ勞働者ノ八時間勞働制ヲ中止スルノ旨ノ布告ヲ發セリ。コレ永年ニ亘リ八時間勞働制ヲ固守シ來リタル勞働界ニトツテ劃期的改正ト云フ可シ。

斯ク一九四二年ニ於テ米國ノ勞働支出量ハ一應完全雇傭狀態ニ達スルモノト判斷シ得可シ。

（甲）労働生産性

（イ）労働、質

一九四二年、労働支出量が前年同様五千百萬人程度ニ止マル時ハ、新規労働力ハ前述、如ク普通手段ニヨリ調達セラルルヲ以テ、労働力、質ハ前年ト大差ナカル可シ。

勿論コ、際部分的ニハ労働力、質ノ低下起ル可シ。即チ非国防産業ヨリ国防産業ヘ、労働轉換ニ伴ヒ現ハルル労働力、質、低下コレナリ。一體米、如ク作業單純分化ヲ圖リ居ル國ニアツテハ、比較的早ク新入労働者ヲ利用スルコト可能ナルモ、尙ホ一夕一朝ニシテ能率ヲ擧ゲ得ルモノトハ限ラズ。一九四一年末ニ於ケル国防産業就業者數六百九十萬人ニ對シ、四二年末ニハ千五百萬人ニ増加スル豫定ニテ、從ツテ一ケ年間ニ国防産業ヘ、新入労働者ハ八百十萬人ナリ。コノ約八百萬人ヲ超エル労働力ヲ得タトシテモ、熟練工ヲ得ル點テ如何ナル程度期待シ得ルヤ、労働統計局、推算ニヨレバ、国防産業ニ於ケル職工ノ三五%ハ熟練工タルヲ要シ半熟練工三〇%、不熟練工二五%見當ナリト、實際ニハ斯カル割合

ニ於テ熟練工ヲ充足スルコト頗ル困難ナリ。既ニ機械工業、造船業、飛行機工業等ニ於テ熟練工ノ不足甚シト傳ヘラル。

然レドモ四二年ノ勞働支出量ガ前年同様五千百萬人程度ニ止マル限リ前述ノ如ク新規勞働力ハ普通手段ニヨリ調達ヤラルルヲ以テ、部分的ニハ勞働ノ質ノ低下現ルルモ、全体トシテ見ル時差シタル低下現レズ。前年ト大差ナシト見ル方安全ナリ。

然シコレニ反シ四二年ノ勞働支出量ガ前年ヨリ著シク増加スル場合ハ既ニ完全雇傭状態ニアル爲、追加勞働力ハ普通勞働力以外ヨリ調達ヤザルヲ得ズ、質的低下ハ不可避ナリ。

(4) 勞働配位

人的資源委員會ノ發表ニコレバ、軍需工業勞働者數ハ一九四〇年百四十萬ヨリ、一九四一年末五百三十萬人、一九四二年一月六百九十萬人一九四二年六月一千二百萬人、一九四二年末迄ニ是ニ五百萬人追加スル方針ナリト。國防産業就業者ノ全就業者ニ對スル比重ハ第八表ヨリ推算

シ、次ノ如シ。

第八表ヨリ國防産業ト非國防産業ノ比重ハ左ノ如ク變化ス。

	一九四一年末	一九四一年末	一九四三年末
國防産業	一三%	二九%	三八%
非國防産業	七七%	七一%	六二%

即チ國防産業就業者ノ全就業者ニ對スル比重ハ一九四一年末一三%、一九四二年六月二四%、一九四二年末二九%ト推定サル。而シテ軍需工業従業員ノ急激ト増加ハ、軍需工業施設新增設ノ完成ニ對應スルモノニシテ、コレ等最新技術ニ採用サル軍需工業部門ノ労働者一人當リ生産高ハ他ノ産業部門ヨリモ一般ニ高キモノト考ヘラルルガ故ニ、労働配置ニ於ケル國防産業従業者ノ比重増加ハ、労働生産性ノ向上ニ資スルモノト推測サル。

(イ) 生産設備

軍需生産ノ急激ト擴大ガ最初ニ計畫ヤラレシハ一九四〇年六月ニシ

、軍需産業ニ對スル新投資ハ一九四〇年後半ヨリ激増ヤリ。而シテ四〇
〇年六月以後ニ於ケル同年度最初ノ大軍需計畫ニヨル軍需産業生産設備
ハ、一九四一年末ヨリ一九四二年上半期ニカケテ大体竣工ヤルモ、ト推
定サレ。第一次大戦當時ニ於テ武器生産ノ發注乃至工場ノ新增設開始ヨ
リ實際生産開始迄ニ一年乃至一年半ヲ要ヤシ體驗ニ徵スルモ、一九四二
年ニ於ケル軍需生産設備ハ、一九四〇年六月ノ大軍需計畫開始當時ニ比
シテ劃期的増強ガ行ハレシコト明カナリ。コノ間ニ於ケル實質資本ノ蓄
積ハ、軍需生産部門ノミニ限ラズ、ヨリ限ラレシ範圍内ニテ全國民生産
ノ諸種ノ部門ニモ及ビシナラン。コノ顯著ノ實質資本ノ蓄積量ト蓄積率
ハ、國民生産ノ労働ノ生産性ヲ著シク増大ヤシムルハ明瞭ナリ。
以上見タル如ク、一九四二年ニ於テハ、一九四一年ニ比シ、労働支出
量ハ略々同様ナルニ對シ、労働ノ生産性ハ對ニ於テ、(イ)労働ノ質ハ差シ
タル低下ナク、(ロ)労働配賦ハ生産性ノ相對ニ高キ軍需生産ニ重點移行シ
(ハ)生産設備ハ急速ニ増加シ、技術的改良顯著ナルヲ以ツテ、國民生産ノ

總額ハ當然増大ス可シ。

但シ右勞働力ト生産設備（資本財）ノ外、更ニ兩者ノ働キ掛ク可キ原料資材（自然資源）ノ供給關係ヲ顧慮スルヲ要ス。

現ニ米國ハ飛躍的ニ増大シ來タレル軍需生産ニ鐵鋼、「マンガン」、「クローム」、「タングステン」、「アルミニウム」、「錫」、「ゴム」等ノ原料資材ノ供給ガ追隨出來ズ、今年九月ニ入り軍需生産ノ増強ハヤヤ停滯性ヲ示スニ至レリ。コレガ爲生産性備ノ擴張ヲ一部停止シ、生産設備擴張用原料資材ノ一部ヲ直接軍需品加工用ニ轉用スラナヤリ。然レドモ米ハ末ダ政府及ビ民間ニ於テ相當量ノ「ストック」ヲ保有スル外、遊休生産設備ノ轉用等可能ナルヲ以テ今年内ハ原料資材關係ヨリシテ生産力増強ガ頭打ノ状態ニ達スルトハ考ヘラレズ。

扱テ右ニ檢討サル諸條件ニ基キ、一九四二年ノ米國國民所得、從ツテ生産力ノ大サヲ測定ヤンガ爲ニハ、先ヅ國民所得ノ變化ヲ規定スルニ大要因タル勞働支出量ト勞働生産性ニ就キ、一九四一年ニ對スル増減率ヲ

推定セザル可ラズ。

労働支出量ニ就キテハ、上述ノ如ク、前年ト同様五千百萬人乃至前年
ヨリ一%前後ノ増加ト推定ス。労働生産性ニ就キテハ、一九四一年ヨリ
著シク増大ス可キハ前述ノ如クナルガ、ソノ程度ヲ直接測定スルノ方法
ナシ。

然レドモ從來ノ体験（一九一〇年ヨリ一九四一年ノ間ニ於テ前年比生産
性増大ノ顯著ナリシハ、一九二一年一%、一九二二年一三%、一九三
九年九%）ニ鑑ミ、一應一九四二年ノ労働生産性ノ前年比増加率ヲ一〇
%内外ト推定ス。然ル時ハ左ノ如シ。

第九表 一九四二年ノ實質及ビ名目國民所得推定

一九四一年實質國民所得（一九二九年弗） 一〇三、三九二百萬弗

一九四二年労働支出量前年比増加率 一%

一九四二年労働生産性ノ前年比増加率 一〇%

労働支出量増加ニ基ク國民所得増加額 一〇三四百萬弗

勞働生産性増加ニ基ク國民所得増加額

一〇、三三九百萬弗

一九四二年ノ實質的國民所得（一九二九年弗）

一一四七六五百萬弗

一九四二年ノ名目國民所得（一九四二年弗）

一一八六六七百萬弗

註、四二年ノ實質國民所得ヲ名目國民所得ニ換算スル場合、卸賣物

價指數ハ、一九〇〇年ヲ一〇〇トシ、一九四二年ヲ一〇三・四

ト推定ヤリ。右ハ同年七、八月頃ノ趨勢ニヨレルモ、更ニ

騰貴ノ傾向アリ、實際ハ更ニ高ク換算ス可キナラン。

一九四三年度國民所得ノ推定

次ニ一九四三年ノ國民所得、從ツテ國民經濟全体ノ生産力ノ大サヲ測定ヤン。

（一）勞働支出量

一九四三年ノ勞働支出量ニ就キテハ、一九四二年八月米國戰時人的資源委員會ノ發表ニコレハ、左ノ如ク五千三百三十萬人ト豫定サル。（第八表參照）

	一九四三年末	一九四二年末
一 國防産業	二〇、〇〇〇千人	一五、〇〇〇
二 非國防産業	三三、三〇〇	三五、八〇〇
三 失業者	?	二、四〇〇
四 兵 員	九、〇〇〇	四、二〇〇
五 使用シ得ベキ勞働力	六二、三〇〇	五七、四〇〇
總計 (一、二、三、四)		
六 實際就業者 (一、二)	五三、三〇〇	五〇、八〇〇

労働力と支出

一九四三年ニ於テ普通手段ニヨリ動員シ得ル通常労働總數ハ五千六百五十萬人見當ト推定サル。然ルニ右ノ内ヨリ九百萬人ヲ兵力トシテ供出セハ、残りノ實際就業者ハ四千七百五十萬人トナリ、設定サレ居ル實際就業者數五千三百三十萬人ニ對シ五百八十萬人ノ多額不足トナル可シ。右處大ニ不足労働力ヲ調達ヤンガ爲ニハ非常手段ニ訴ヘルノ外ナク、

非常手段ニヨル戰時勞働力追加調達ノ限界ハ、前大段ノ體驗ニ依レバ、普通手段ニヨリ動員シ得ル通常勞働力ノ一〇%ナリ。從ツテ右非常手段ニヨル新規勞働力調達ハ一九四三年ニハ、五千六百五十萬人ノ一〇%タル五百六十五萬人ナリ。

斯クテ不足勞働力五百八十萬人ハ、右手段ニヨル五百六十五萬人ノ追加動員ニヨリ、略々充足セラル。ソレ故普通手段ニヨル勞働力五千六百五十萬人「プラス」非常手段ニヨル勞働力五百六十五萬人、計六千二百十五萬人トナリ、米國戰時人的^{付原}委員會ノ發表ノ四三年度使用シ得ベキ勞働力總計六千二百三十萬人ハ略々充足可能ナリ。右ノ内ノ實際就業者數ハ、一九四二年末豫定ノ五千八十萬人ヨリ二百五十萬人多ク、五千三百三十萬人トナル。斯ク實際就業者數増加スルハ、一九四二年ヨリ^九四三年ニカケ軍需産業ノ生産設備ノ新增設ガ一段ト進展スルガ爲ナリ。

㊦ 勞働生産性

㊧ 勞働ノ質

労働、生産性ニ就キテハ、追加労働力ノ質ハ著シク低下スルコトハ必
至ナリ

(四) 労働配置

労働配置ニ就キテハ、軍需工業ニ重點ガ更ニ移サルルヲ以テ、大量生
産制ハ軌道ニ乘リコノ點労働生産性ハ前年ヨリ増大ヤン。

(五) 生産設備

生産設備ハ一九四一年米參戰以降ノ大軍擴計畫ニヨル大増強ハ一年乃
至一年半後、從ツテ一九四三年中ニハ完全ス可ク、最新式高度ノ技術裝
備ニヨリ労働生産性ノ増大ニ著シク寄與スルナラン。

結局一九四三年ノ労働生産性ハ四二年ヨリモ増大スト見テ差支ナカル
可シ

以上ニヨリ、一九四三年ノ労働支出量ハ前年ノ五千八十萬人ニ對シ五
千三百三十萬人、從ツテ約五%増大ス。一九四三年ノ労働生産性ハ、一
九四二年ノ對前年増加率ト同様カ、又ハコレヨリ稍々低キモノト見、一

○%以下ト推定サル。コレニヨリ四三年ノ實質國民所得、名目國民所得、變化ヲ推算セバ、左ノ如シ。但シ名目國民所得ハ、來年度物價騰貴ノ指數ヲ正確ニ推定シ得ザルヲ以テ、一應一九四二年弗ニテ示スコトニヤリ

第十表 一九四三年ノ實質及ビ名目國民所得推定

一九四二年實質國民所得（一九二九年弗）	一一六、〇五四百萬弗
一九四三年勞働支出量ノ前年比增加率	五%
一九四三年勞働生産性ノ前年比增加率	一〇%
勞働支出量増加ニ基ク國民所得増加額	五、八〇〇百萬弗
勞働生産性増加ニ基ク國民所得増加額	一一、六〇五百萬弗
一九四二年弗テ示サル一九四三年ノ名目國民所得	一三八、〇〇〇百萬弗
一九四三年ノ實質國民所得	一三三、四五九百萬弗

但シ注意スベキハ、右ノ判定ハ四三年ニ兵力動員九百萬ニ達スルコトヲ前提シ居リ、萬一米ガ四三年ニモ第二戰線ヲ構成ヤズ、從ツテ動員兵力九百萬以下ナル時ハ、勞働力ニ豫裕アルヲ以ツテ、生産力増加率ハ更ニ

ハナル可ク、且ツ次ニ述ブル如ク、四三年ノ項點トシ、四四年ヨリ直チニ
生産力低下ストハ速斷シ難ク、幾分米ノ生産力ガ頭打チニ達スル時期
ハ遅ルルナラン。

一九四四年度國民所得ハ推定

労働支出量

労働支出量ハ既ニ一九四三年ニ最高限度ニ達シ、コレ以下ノ新規追加ハ不可能ナリ。從ツテ兵員數ガ前年同様九百萬ニ止マル限リ、労働支出量ハ同一ナルモ、更ニ兵力動員ヲ増加セバ、労働支出量ハ不可避的ニ減少ス可シ。

茲ニ於テ米國ハ更ニ労働支出量ヲ増加セントセバ、國外ヨリノ労働力供給ヲ求メザルヲ得ズ。即チ「カナダ」及ビ「ラテン・アメリカ」ヨリノ労働力補給ガ果シテ期待シ得ルヤ否ヤガ問題トナラン。左ニ人口數ヲ示サバ、

第十一表 「カナダ」及ビ「ラテン・アメリカ」ノ人口統計

國	別	國勢調査年度	人	口	數	備	考
カ	+	ダ	一九三七年	一一、一〇〇、〇〇〇			

ラテン・アメリカ諸國合計

内 譯

アルゼンチン	一九三七年
ボリビア	一九三七年
ブラチル	一九三七年
チリ	一九三七年
コロンビア	一九三六年
コスタリカ	一九三六年
キューバ	一九三六年
ドミニカ	一九三七年
エクアドル	一九三七年
ガテマラ	一九三七年
ハイチ	一九三七年
ホンチユラス	一九三七年

一二、三五〇三、三八四	
一、二、七六一、六一一	
三、二八二、七五五	
四三、二四六、九三一	無學文盲 七〇%
四五、九七、二四五	二五%
八、六六五、〇〇〇	四八%
五九一、八六二	
四一〇、六六五〇	三九%
一、五八一、二四八	八〇%
二、七五六、〇〇〇	
三、〇〇七、七一五	
二、七〇〇、〇〇〇	
九六二、〇〇〇	六七%

ノキシコ	一九三七年	一九一五四〇九二	・	五九%
ニカラグア	一九三八年	一、〇〇〇、〇〇〇	・	
バハマ	一九三六年	五三四六三一	・	五〇%
バラグアイ		九〇〇、〇〇〇	・	
ベルト	一九三六年	六、五〇〇、〇〇〇	・	五〇%
サルバドル	一九三六年	一、六三二、〇〇〇	・	
ウルグアイ	一九三七年	二、〇九三、二二一	・	三五%
ベネツエラ	一九三六年	三、四二八、四二三	・	五七%

先ツ「カナダ」ニ就イテ見ルニ、人口僅カ千百万人ニシテ、勞働力動員最大限變ハ人口ノ約半分近クノ五百万人見當ニ止マル。然ルニ英本國ノ物資補給ノ爲勞働需要累加シ居ルニトドマラズ、更ニ海外派遣ノ爲兵力動員行ハレ居ル關係ト、現在既ニ完全雇傭状態ニアル可ク、今後本國ヘノ不足勞働力補給源トシテ殆ンド期待シ得ザル可シ。

大ニ「ラテン・アメリカ」諸國ヲ見ルニ、人口總計約一億二千萬餘ニ

達シ、略々米國（一億三千萬）ニ匹敵スト雖モ、人口ノ半分以上ハ「インデアン」「ニグロ」、混血ニシテ、殊ニ「ベネツセラ」「コロンビア」「エクアドル」「ペルー」「ボリビア」「パラグアイ」ノ如キハ八〇乃至九〇%ハ「インデアン」系ガ占メ、一方「ラテン・アメリカ」全体トシテ白人系ハ僅カ三〇%見當ニトドマル。而カモ教育程度ハ約五〇%ガ無學文盲ナリ。從ツテ米國ガ最モ不足ヲ感ジツツアル工業部面ノ勞働力補給源トシテハ殆ンド「ラテン・アメリカ」ニ期待シ得ズ。寧ロ米國內ノ農業従業者ヲ工業部面ニ一部轉換ヤシメ、之ガ補充ノ目的ヲ以ツテ、農業勞働者トシテ利用スルカ、乃至ハ鑛山勞働者ヘノ利用ハ一應可能ナリト考ヘ得ベシ。然レドモ米國ノ如キ機械化農業乃至機械化サレタ鑛物採掘ニ中南米勞働力ノ利用ハ事情上困難ナリ。而モ「ラテン・アメリカ」殊ニ南米ハ一般ニ人的資源不足ノ状態ニアリ、假令現在農産物ノ對歐輸出停滯ニヨリ多少農業部面ニ失業者現ハレトモ、右ハ今後「ラテン・アメリカ」ガ米ノ不足スル鑛物資源（錫、マンガン、クローム、

「タングステン」ヲ補給ヤンガ爲、鑛山ノ強行開發ヲ行ハザルヲ得ズ、從ツテ農業部面ノ過剩勞働力ハ鑛山部面ニ吸收サレ、差シテ米國へ直接供出ス可キ過剩勞働者存サザル可シ。且ツ人種的、政治的制約（白人系少ク、而カモ白人系中獨伊ノ移住民多シ）ニヨリ勞働移動望ミ得ズ。

要スルニ「ラテン・アメリカ」ノ人口ハ米國ニトリ殆ンド直接不足勞働力ノ補給源トナリ得ズ、間接ニ不足原料ノ補給源タル役割ヲ果スニ止マラサレバ一九四四年ニアツテハ、四三年以上ニ新規追加勞働力ヲ求ムルハ不可能ナリ。寧ロ兵力動員増加ニ正比例シ勞働支出量ハ減少ス可シ。

㊦ 勞働生産性

(1) 勞働ノ質

動員兵力前年ト同様ナレバ、勞働ノ質略々同一ニ止マリ得ルモ、兵力動員増加ヤバ、單ニ勞働支出量減少スルノミナラズ、更ニ勞働ノ質

ノ低下ハ不可避ナリ。

(四) 労働配置

労働配置ノ軍需工業中心ヘノ再編成ハ既ニ完了シ、コノ際ヨリスル労働生産性ノ増加ハ最早望ミ難シ。

(五) 生産設備

軍需産業ノ生産設備擴張ハ資材關係ヨリ既ニ限界點ニ達シ居レリ。國
産生産設備擴張用ト軍需生産加工用トノ間ニ於ケル資材ノ奪ヒ合ハ既ニ
一九四二年中頃ヨリ現ハレ、コレガ爲生産設備擴張ノ一部ヲ停止シ、生
産設備擴張用資材ヲ直接軍需品加工用ニ轉用スラ行ヒシコト前述ノ如シ
然レドモ米ハソノ自給不可能ナル原料資材、殊ニ「マンガン」「クロ
ム」「タンクステン」等ノ特殊鋼原料、「アルミニウム」「錫」等ノ非
鐵金屬、更ニ「ゴム」等ハ約二ケ年間ソノ不足ヲ補充スルニ足ル「ス
トック」最チ戰時保存シ居リ、又鋼板ノ不足ハ産業轉換ニ伴フ膨大
ノ遊休設備ノ「スクラップ」化ニヨリ二ケ年間ハ兎ニ角補充シ得ベシ。

サレバ四二年中頃ニ現ハレシ原料資材ノ不足ヨリスル一時的生産停滯ハ
ナホ克服シ。然レドモ參戰ニケ年後ノ四三年末ニ至リテハ最早
急速ナル軍需生産ノ擴張ニ原料資材ハ全ク追ツキ得ズ、茲ニ原料資材増
産ノ爲ニ基礎産業ニ於ケル生産設備ノ擴張ヲ要ス可ク、之ニ對スル原料
資材ト軍需品加工ニ要スル原料資材トノ間ノ擦ハ尖銳化サレ、原料資
材ソノモノノ絶對的不足ニヨリ、生産設備ノ擴張モ軍需品生産ノ擴張モ
共ニ不可能トナル可シ。

茲ニ於テ一九四四年ニハ、(一) 働支出量ノ増加モ望ミ得ズ、(二) 働生
産性中(イ)ノ働ノ質モ同一乃至低下シ、(ロ)ノ働配置ノ轉換モ最早望ミ
得ズ、(ハ)ノ生産設備ノ擴張モナシ得ズ、更ニ働力ト資本財トガ結びツ
キ加工ス可キ原料資材ノ絶對的不足スラ現ハレ、爲ニ一九四三年ヲ以テ
トシテ、四四年以後ハ生産力ノ低下現ハル可シ。

然ラバソノ生産力低下ノ程度如何

扱テ生産力ノ變化ヲ決定スル要因タル(一) 働支出量、(二) 働生産性並

ビニ(三)原料資材ノ供給量中、第二ノ要因タル労働生産性ハ前年ノ四三年ニ較ベ差シタル變化ナカル可シ。即チ労働生産性中ノ(イ)ノ労働ノ質ハ同一乃至幾分低下スルニ由リ、(ロ)ノ労働配置ノ轉換ハ最早行ハレズ、前年ト略々同様、(ハ)ノ生産設備ノ擴張モナシ得ズ、前年ト略々同様ト看做サレ得可シ。サレバ前年ノ四三年ニ較ベ四四年ニ於ケル生産力ノ變化ヲ決定スル主タル要因ハ(一)ノ労働支出量ト(二)ノ原料資材ノ供給量如何ナリ。

ゴノ際ニツノ場合想定サル。一ハ動員兵力ガ四三年(九百萬)ト同一ナル場合、他ハ動員兵力増加スル場合ナリ。第一ノ想定ハ、四三年中ニモホ船腹不足ノ關係上大規模ノ第二戦線ヲ構成シ得ズ、從ツテ四四年ニ至ルモ依然トシテ動員兵力九百萬ニ止マル場合ナリ。斯カル場合ニアツテハ、(一)ノ労働支出量前年ト同一ナルヲ以ツテ、結局(二)ノ原料資材ノ供給量如何ガ生産力ノ變化ヲ決定スル主ナル要因タリ。

擬テ原料資材中一國生産力ノ大サヲ示ス重要ノ指標タル得ルハ鋼鐵ノ

生産額ナリ。鋼鐵ノ主要原料（鐵鋼、屑鐵、滿俺鐵、石炭）中、鐵鋼、石炭ノ供給ニ米國ハ差シタル不安ナシ。次ニ屑鐵ハ最近ソノ出廻リ悪キ爲、今年ニ於ケル米ノ鐵鋼増産ノ障碍タリシモ、右ハ最高價格安カリシ爲ニテ、將來最高價格ノ修正行ハルレバ、出廻ル可ク、更ニ産業轉換ニ伴フ厩大ニ遊休生産設備ノ「スクラップ」化ニヨツテ、増加スル需要ヲ充足可能ナリ。問題ハ滿俺鐵ノ供給ニ存ス。

蓋シ鋼塊一屯ノ生産ニ平均品位三五%ノ滿俺鐵〇・〇一五屯（七八一八二%ノ金屬滿俺ナレバ〇・〇〇六四屯）ヲ要ス。然ルニ最近ノ外電ニコレバ、一九四二年ノ上半期鋼塊生産額官積ハ四千二百五十萬屯ナルヲ以ツテ、下半期モ略々同様ト見テ、一ケ年生産額約八千五百萬屯ナリト推定シ得。更ニ一九四三年度ノ鋼塊生産額ヲ推定ヤンニ、先ニ實質的國民所得ハ四二年ニ較ベ四三年ハ約十五%増ト判定サルヲ以ツテ、鋼塊ノ生産額モ八千五百萬屯ノ十五%増ノ九千七百萬屯見當ト推定サル。右九千七百萬屯ノ鋼塊生産ニ要スル滿俺鐵ハ、先ニ示サル生産系数ニコレバ

約五百五十萬屯ヲ要ス可シ。

コレニ對シ滿俺鐵ノ供給ガ現在生産管理局ニテ計畫シ居ル國內貧鐵開發並ビニ南米ノ増産強行ニヨリ理想的狀態ニ四三年ニ達ストヤバ左ノ如シ。

國內ノ貧鐵開發ニヨル年産	六〇萬屯（從來八一二乃至一五屯）
「ブラチル」ヨリノ輸入	五〇萬屯（一九四〇年輸入量一七萬屯）
「キューバル」ヨリノ輸入	一八萬屯（一九四〇年輸入量一三萬屯）
「チリ」ヨリノ輸入	一〇萬屯（一九四〇年輸入量八千屯）
合計	一三八萬屯

從ツテ需要量百五十萬屯ニ對シ理想的供給量一三八萬屯ナルヲ以テ、八%不足ナリ。然レドモ實際四三年ニ斯卡ル理想狀態ニ達スルハ全ク不可能ニテ、假令ホ印度、「ゴトルドコースト」等ヨリノ輸入ヲ繼續シ得ルモ不足ス可シ。サレド開發後滿二ケ年間ハ「ストツク」ニヨリ不足分補填可能ナリト推定シ置ク。

然ルニ四四年度ニハ「ストツク」ニヨリ不足分補填ハ不可能ニシテ、且ツ印度、「ゴールドコースト」ヨリノ輸入モ差シテ期待シ得ズ、主トシテ西半球ニ依存スルノ外ナシ。ソノ際米國ニ最モ有利ニ考ヘ、右ノ理想状態ニ達シ、滿俺鐵ノ供給量年百三十八萬屯ニ達ストヤバ、前年ニ消費可能ナリシ百五十萬屯ニ對シ八%減ズルコトナリ、從ツテ鋼塊ノ年産額モ八%減ズ可シ。更ニ鋼塊ヲ一國生産力ノ重要指標ト看做サバ、四四年度ノ米ノ生産力モ四三年ニ較ベ八%低下スト推定シ得。

次ニ第二ノ想定トシテ、四四年ニ更ニ動員兵力増加スル場合如何。斯カル場合ハ原料資材ノ點ヨリ生産力低下スルノミナラズ、動員兵力増加スルダケ勞動支出量減少シ、コノ點ヨリモ生産力低下ス。假リニ四三年ノ下半期以後大規模ナ第二戰線ヲ構成シ、ソノ結果四四年ニハ動員兵力ガ千五百萬人ニ増加シ、從ツテ前年ニ對シ追加動員兵力六百萬ナルトス然ル時ハ、四三年ノ勞動支出量五千三百三十萬人ノ内、ソノ約一〇%ニ當ル六百人が生産部面ヨリ引去ラレル故、四四年ノ生産力ハ勞動支出

量ノ點ヨリ一〇%見當低下ス可シ。右勞働支出量ノ減少ヨリ一〇%並
 ビニ原料資材ノ面ヨリスル八%ヲ合シ、全体トシテ約十八%見當ノ生
 産力低下ヲ來ス可シ。

右四四年ノ生産力低下率ヲ實質的國民所得金額デ表示ヤバ左ノ如シ

第十二表 一九四四年ノ實質國民所得ノ推定

第一ノ想定(動員兵力前年ト同一ノ場合)

一九四三年實質國民所得 一三三、四五九百萬弗

原料資材ノ面ヨリスル低下率八% 一〇、六七二百萬弗

一九四四年實質國民所得 一二二、七八七百萬弗

第二ノ想定(動員兵力千五百萬人ニ増加スル場合)

一九四三年實質國民所得 一三三、四五九百萬弗

原料資材ノ面ヨリスル低下率八% 一〇、六七二百萬弗

勞働支出量ノ面ヨリスル減少率一〇% 一三、四四二百萬弗

一九四四年實質國民所得 一〇九、四四二百萬弗

一九四五年度以後ノ國民所得變化ノ推定

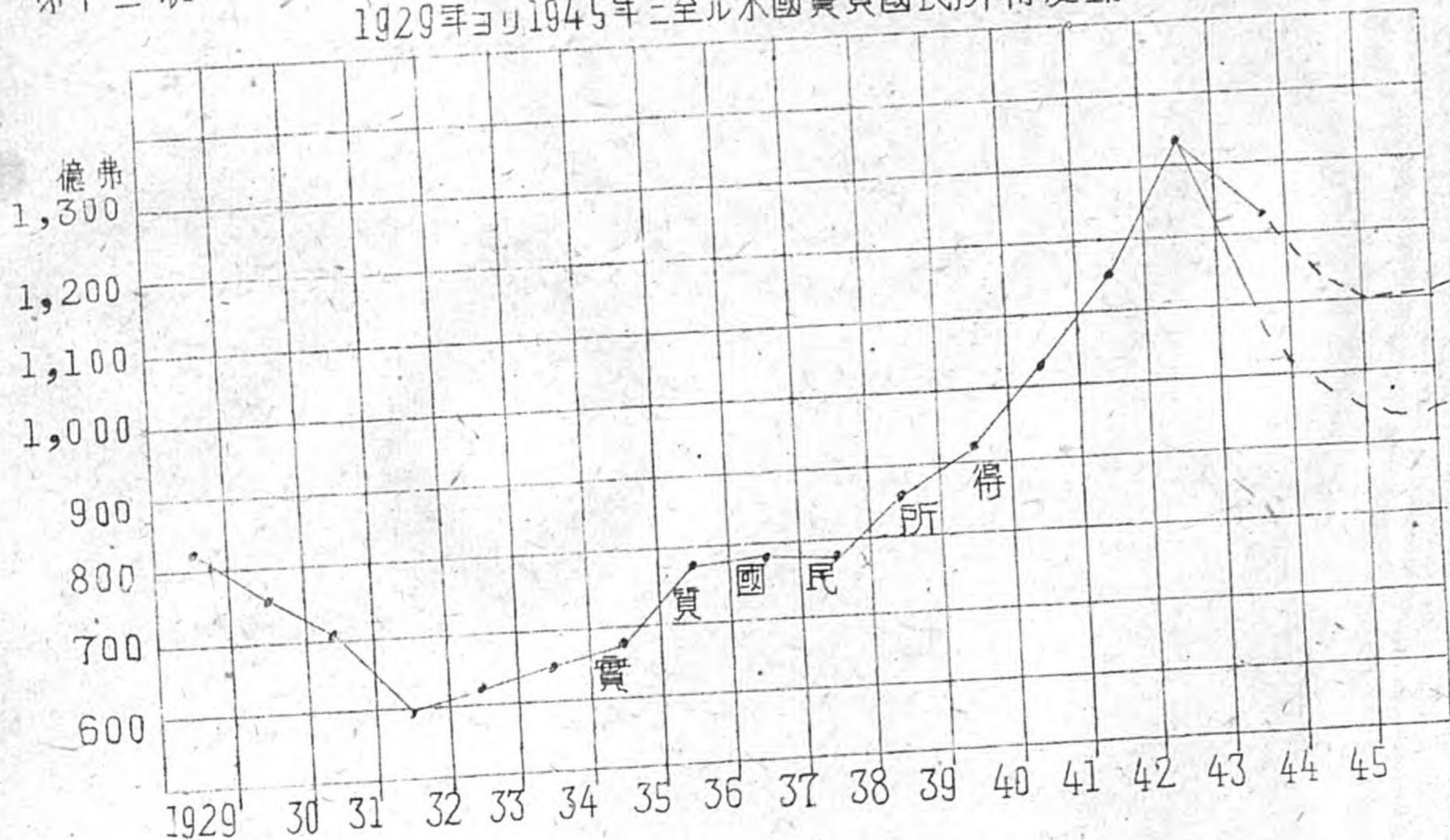
四五年以後ニ於テモ、米國生産力ノ變化ヲ規定スル要因ハ、生産技術ノ革命ナキ限リ、主トシテ勞働支出量ノ變化ト原料資材ノ供給量ナリ。假リニ四四年ノ動員兵力千五百万人ヲ維持シツツ戦争ヲ経續スルトセバ、死傷者ヲ補充スルダケ勞働支出量ハ減少シ、從ツテ生産力ハ低下ス可シ。

然レドモ直線的ニ低下セズ、恐ラク波動的ニ低下ス可シ。何トナレバ原料資材ノ供給不足ヲ補ハンガ爲、一時作戰ノ規模ヲ縮少シ、軍需品ノ消耗ヲ減ゼシ、コレニロツテ軍需品ノ加工原料ニ割當ツベキ分ヲ一部削減シ、コレヲ原料資材ソノモノノ生産設備ノ擴張ニ振り向ケ、一年乃至一年半後生産設備ノ完成ヲ俟ツテ、再ビ原料資材ノ増産ヲ企圖スルガ故ナリ。

右ノ關係ヲ圖ニ示セバ次ノ如シ。

第十三表

1929年ヨリ1945年ニ至ル米國實質國民所得變動表



前年比増加率% -8.3 -6.7 -16.9 +4.0 +4.5 +4.0 +15.4 +2.2 -1.9 +11.2 +7.5 +12.2 +11.0 +15.0 -8.0
 -18.0

直接思想戰關係

演習處置書

第二期植智所収情况 (一月中旬迄)

表置

大政翼贊會

文部大臣

内務大臣

農林大臣

情報局長

2

大東亞戰爭第二年以降之植智所収情况(案)

内閣

政府声明要綱 (案)

政府ハ組閣以來八紘為宇ノ肇國精神ニ基キ舉國一致大東亞戦争ヲ戦ヒ來リタルモ、現下ノ國際情勢ニ鑑ミルニ愈々國体紀念ヲ明徴ニシ聖戰目的完遂ノタメ急速ニ皇國總力戰体制ヲ整備シ、以テ國家ノ綜合戰力ヲ統合發揮スルノ要アリ。コレカタメ國民總力ヲ集メト戰備増強ヲ中心トスル庶政ノ根本的刷新ヲ断行シ、以テ戦争國家体制ヲ確立シ、長期戦完勝ニ邁進セントス。

一、軍事

現在及將來戦ニ完勝スルニ必要ナル軍備、特ニ航空兵力ノ急速拡充ヲ図ルコト。
 (内務、海防)

二、外交
 世界新秩序建設ノタメ樞軸諸國トノ提携ヲ一段ト強化シ、國民政府ノ育成、対口國交ノ調整ヲ

圖リ、戦争目的達成ノ為、軍事ニ即應ニ弾力性アル施策ヲ濫ズルコト

三、國內態勢

1. 内政

皇權發揚、運籌帷幄、謀略進退

(1) 強力ナル國民組織ノ確立ヲ図ルコト

✓ (2) 新政治体制ノ確立ヲ図ルコト (議會制及内閣制)

✓ (3) 強力ナル情報宣傳機關ヲ設置スルコト

✓ (4) 行政機構ノ根本的改革ヲ図ルコト (軍需省、交通省等)

2. 思想

(1) 國体明徴ノ徹底ヲ図ルコト (教學刷新)

(2) 日本の勤勞精神ノ昂揚ヲ図ルコト

(3) 各級指導者ノ鍊成ヲ行フコト

3. 經濟

(1) 軍需生産ノ急速拡充ヲハカルコト

(2) 船舶建造ノ急速拡充ヲハカルコト

(3) 勞務配置ノ統制強化ヲハカルコト

政府根本方針

政府の組織以來八紘為宇の堅固精神ニ基キ舉國一致大東亞戦争ヲ戦ヒ來リタカ、現下ノ國際情勢ニ鑑ミルニ愈々國体觀念ヲ明徴ニシ聖戰目的完遂ノタメ急速ニ皇國總力戰体制ヲ整備シ、以テ國家ノ綜合戦力ヲ統合發揮スルノ要ガアル。コレガ為メ國民總力ノ結果ト戰備増強ヲ中心トスル庶政ノ根本的刷新ヲ断行ス、以テ決戰國家体制ヲ確立セントスルモノガアル。

- ① ソ聯ニ對スル戰備ヲ益々完實強化スルモ戰甲ハ出サズル限リ之ヲ迴避シ、獨ノ調停ニ関スル万般ノ處置ヲ構ズルコト。
(心措ヘ、終及)
- ② 樞軸提携ヲ強化スルコト。
- ③ 根本方針ニ付キ獨伊ト完全ナル諒解提携ヲ遂ゲ且テ戰甲

目的及我後ノ世界新秩序ノ構想ヲ三國共同宣言トシテ發表スルコト。

- 4. 行政機構ノ根本的刷新ヲ期ス。但シ差事リ堅急ニ己レヲ得カルモノニ止テ、軍需省ト交通省ヲ設置スルコト
- 5 民族政策ノ樹立
- 6 重慶政権ニ對シテ國民政府ヲ通シテ和平政勢ヲ展開スルコト。
- 7 科学技術ノ振興及總動員
- 8 勞務配置ノ統制強化
 - イ、軍需生産ノ重要外徹底ノ為ニ急屋業部門ノ整理及徵用範囲ノ拡大
 - ロ、女子勞働力ノ動員強化
 - ハ、口民皆兵判ト口民皆勞主義トノ調和ナル施策
- 9 訓練工ノ養成ト確保
- 10 庶業應徵者ノ訓練及保護施設ノ強化

11. 整理會、再決定、後受敷、半減

12. 情報宣傳、機關、強化

13. 統制經濟ニ於テハ、監査取締、強化

14. 口民生活、切下ゲト、最低限確保

15. 軍需生産、急速拡充

生産拡充ノ重要的實施、ソノ種類及噸位ハ左ノ如ク
鉄鋼、造船、航空機(陸空用)、石炭、電力、機械

口、指導機構
a. 軍需生産ノ統制一元化(外地ヲ含ム) (軍需省設置)

b. 軍需生産團、統制會、幹部人事、軍需省へ一元化

c. 統制會ニ人事權附與

d. 軍需官、天降リタル人ヲ、産止

ハ、不生産業及非生産工場、優等工場へ合併

ニ、工場管理、徹底

16. 不急商工業ノ徹底の整理及農村生産ノ強化

17. 農林水産業生産力ノ拡充、強化

18. 木、労力、資材、資金、輸送、倉庫、重要的配當

19. 口作明徹ノ徹底

20. 口民生氣ノ昂揚

21. 口民生氣ノ昂揚

政府根本方針
(第三次圖說)

政府「八紘為宇」之舉國精神。基キ強カニ皇國總力
戰体制ヲ確立展開ス而シテ現下大東亞戰爭ヲ戰後
強ク中心トスル庶政ノ根本的刷新ヲ斷行シ以テ決
戰國家体制ヲ確立セシトス

一、國作以徹ヲ徹底シ各職域ニ於ケル國民志氣ノ昂
揚ヲ図ルコト

二、對ソ壓力ヲ強化シ對ソ國交調整ヲ因^ハリ^テ自^ラ軸^國
間ノ提携ヲ緊密ナラシムル^ト申^ス

三、勞務ノ配直及組織ノ統制ヲ強化スルコト

四、情報宣傳機構ヲ整備拡充スルコト

五、國民生活ヲ調整シ其ノ必要限^度ヲ確保スルコト

六、軍需生産ノ急速拡充ヲ圖ル為生産擴充ノ重點的
実施ヲ徹底スルコト

七、海上輸送力ノ飛躍的增強ヲ圖ルコト

以上

極秘

政府一般方針（昭和十七年十一月七日閣議決定）

政府ハ八紘為宇ノ肇國精神ニ基キ強力ニ皇國總力
戰体制ヲ確立展開ス。而シテ現下大東亞戰爭ヲ戰
ヒ抜ク者メ國民總力ノ結集ト戰備増強ヲ中心トス
ル庶政ノ根本的刷新ヲ断行シ以テ法戰國家体制ヲ
確立セントス。

一、國体明徴ヲ徹底シ各職域ニ於ケル國民志氣ノ昂
揚ヲ図ルコト

二、枢軸國間ノ提携ヲ緊密ナラシメ對蘇國交調整ヲ
図ルコト

三、情報宣傳機構ヲ整備拡充スルコト

四、軍需生産ハ急速拡充ヲ図ル為メ生産拡充ノ重要
的實施ヲ徹底スルコト

五、勞務ノ配置及組織ノ統制ヲ強化スルコト

六、海上輸送力ノ飛躍的増強ヲ図ルコト

七、國民生活ヲ調整シ其ノ必要限度ヲ確保スルコト

以上

極秘

政府一般方針（昭和十七年十一月七日閣議決定）

政府ハ八紘為宇ノ肇國精神ニ基キ強力ニ皇國總力
戰体制ヲ確立展開ス。而シテ現下大東亞戰爭ヲ戰
ヒ拔ク為メ國民總力ノ結集ト戰備増強ヲ中心トス
ル庶政ノ根本的刷新ヲ斷行シ以テ法戰國家体制ヲ
確立セントス。

一、國体明徴ヲ徹底シ各職域ニ於ケル國民志氣ノ昂
揚ヲ図ルコト

二、枢軸國間ノ提携ヲ緊密ナラシメ對蘇國交調整ヲ
図ルコト

三、情報宣傳機構ヲ整備拡充スルコト

四、軍需生産ハ急速拡充ヲ図ル為メ生産拡充ノ重要
的實施ヲ徹底スルコト

五、榮務ノ配置及組織ノ統制ヲ強化スルコト

六、海上輸送力ノ飛躍的増強ヲ図ルコト

七、國民生活ヲ調整シ其ノ必要限度ヲ確保スルコト

以上

第三期演習處置書 其ノ

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ
通知先

大東亞相

提出時

(想定) 昭和十
(實曆) 十二月十二日時刻十二時

提出者

大東亞省局長

(演習官)
氏名

小林信明

十月末迄ニ執ラントスル處置

一、新占領地区ノ計劃的開發ヲ策ス

開發ノ緊急目標、地域並ニ

労働力ニ関スル方途左ノ如シ

目標及地域

1. タングスレン

廣東省

曲江

翁源

江西省

南康

崇義

大廣

ロ、アンチモニー

湖南省

長沙附近

(新化)

ハ、マンガ

湖南省

湘潭

衡山

新城

安仁

築邨

ニ、鉛

湖南省

水口鎮

總力戰研究所

勞働力

勞働力ニ関シテハ當初ハ苦力頭ニヨリ必要數ヲ充タシ

漸次ニ着勞働者ヲ使用シテ組織化セントス

二、經濟逼迫ニ關聯スル處置トシテ左ノ方策ヲ講ズ

1. 新國民運動ヲ中心トスル支那人ノ積極協力ノ誘發

2. 青少年運動ノ促進強化

3. 清郷工作ニヨル物資ノ供出

4. 通貨施策ニヨル敵地物資ノ流入獲得 要スレバ偽造日法幣ヲ使用ス

5. 一般ニ旧來ノ施策ヲ更ニ強化シ併セテ新地ニ中心トスル工作ニ迄進展セ

シム 就中緊要トスルモノ左ノ如シ

イ、警察行政機構ノ確立

ロ、東亞聯盟會員ノ奧地活動

ハ、重慶陳營ノ切崩引入工作

ニ、左支邦人ノ現地職業指導

ホ 邦人ノ現地教育

(以上)

軍事技術

緊急施策

内閣府

一、軸國間提携強化

(一) 情報及意見交換を為獨逸^伊対し有力ナル特派使節團ヲ派遣ス

(二) 在獨外交機關ヲ強化ス

(三) 日獨間物資交換ヲ強化ス

(四) 航空連絡ノ急速實施ヲ図ル

(五) 戦争目的及戦後ノ世界秩序ニ関スル日獨伊三國共同宣言ヲ協定發表ス

確立ス

二、對蘇國交調整

(一) 差當り中立條約確認及強化ヲ目標トスル共同聲明
乃至覺書ヲ交換ス

(二) 將來情勢ニ應ジ全面的調整ニ進ム態勢ヲ整フ

三、對中立國政策強化

(一) 獨伊ト連絡ニテ法王廳ニ對シ戰火波及防止ノ為
人道主義的見地ニ基ク中立「ブロッケ」形成ヲ勸
獎ス

✓

(二) 亞智兩國ニ対シテハ獨伊ト協調ニテ中立維持ノ為
折衝及宣傳ヲ強化ス要スルハ謀略強化及武力ヲ要
示威等ヲ又併セ行フ

(三) 土西葡國等ニ対スル施策ハ獨伊ヲ主トシ我方ハ等ニ対
側面ヨリ之ヲ援助ス

四、情報宣傳及言論取締ノ強化

尚面ノ戦争目的ヲ達成セシカ為ニ外交施策及國內的
対策ノ線ニ沿フテ強力活潑ニ情報宣傳ノ活動ヲ
展開シ且言論取締ヲ強化ス

(一) 戦争目的ノ徹底及敵ノ戦争目的ノ攻撃

入ル下
性山ヨリ

梅相ノ意見
遠慮(者知ノ内題)ハ是迄極力トト

C.
M

改題

⑤

- (一) ~~悲觀論~~ 撲滅 (特ニ對インテリ工作) コノ為戰後ノ滅 (特ニ對ソビエト) 世界新秩序ノ構想ヲ至急明確ナラシム
- (二) 外交政策ノ線ニ沿フテ對蘇對支對獨伊對中之國線ニ對シテ對法ニ應ヘテ政策
- (三) 南方占領地ニ對スル責任及擔當應能協力ヲ宣傳
- (四) 敵國島間工作
- (五) 防空國民生活切下ケテ認識徹底、並ニ近代航空戰生活切下
- (六) 通商破壞戰^實相^實圍^實明^實經^實濟^實事情
- (七) 新聞雜誌再編成
- (八) 政府ノ政策ニ對スル及對論及對蘇開戰必至ノ策ニ對スル議論ヲ取締

(九)

宣傳

網 / 強化

編成

後三研究

軍隊組織

二準

命令系統

ヲ設

各職域

ヲ

統一的 = 運動ヲ展開

又獲得

其對象

對策ハ例ハ

ハ

翼壯、產報、鄉軍幹部、文化人及ソ、

組織

生産面、責任者、學校教員及大學生

空想同、強化

五、國民^士精神ノ昂揚

(一) 國体明徹ノ徹底ヲ期シ更ニ各機關ヲ拏ゲテ國家本位ノ學術ヲ振作シ鍊成機構ノ強化ト相俟ツテ汎々学徒ノ報國態勢ヲ固クス

右ノ爲教學教化ノ事業ニ從事スル者並ニ~~學生生徒ノ~~自發的新活動ヲ促進スルト共ニ延テハ一般社会ノ積極的協力ヲ要望ス。

(二) 十二月八日大詔渙發記念日ニ於テ首相陸海外相ヨリ國民ニ訴フヲ才演說ヲ行ヒ且翼贊會副總裁司會ノ下ニ全國一斉ニ聖戰完遂國民大會ヲ行フ

(三) 十二月二十五日ノ香港陷落記念日ニハ翼贊會主催ニテ

対米英敵愾心ノ昂揚ヲ行フ

(四) 一月一日ノソロモン島ノ米軍降伏ニ際シ先軍ノ辭ヲ

兼本首相ヨリマイクシヲ通ジテ全國民ニ告グ

(五) 隨時各級各部門指導者ヲ招致シテ帝國ノ現段

階ノ真相ヲ説明徹底セシム。

(六) 臨時中央協力会議ヲ開催ス

民生必需品ノ確保國民生活ノ調整

(陸軍大臣)

(一) 昭和十八年交野林水産物需給計画ヲ設定シ之が

完遂ノ爲ノ重要野林、水産物ノ増産ニ付テハ一

層從來ノ方策ヲ強化スルト共ニ更ニ左ノ諸方

策ヲ講ズルコト

此等ノ下力ニ表林、長知我ニ付(15)

1. 議會通過法律案ノ急速実施ヲ図ルコト

2. 小作料統制令ノ運用ヲ更ニ強化シ小作料ノ適正
化ニ努ムルコト

3. 生産奨励金ヲ拡充スルコト (物価回遊の確保 (第1))

4. 農民褒賞制度ヲ拡充スルコト

5. 奨励金等ニ依ル技術ノ拡充強化ヲ図ルコト

6. 指導者ノ錬成機構ヲ整備スルコト

7. 肥料ノ自給(例へば塵芥回收ノ強化、雑草刈取等)
ヲ強化スルコト

8. 国有林等林野ノ積極的活用ニ依ル牛等畜類

ノ増殖ヲ図ルコト

9. 休耕地特ニ都市近郊ノ空地等ノ徹底的利用
 = 依ル野菜及大豆、菜種等油脂植物ノ増産
 ヲ図ルヲ(学生、生徒、一般家庭未就業婦人等
 ノ勤勞作業ヲ組織的ニ拡充スルヲ)
 (二) 各種配給統制規則ノ強化ト配給ノ円滑化統一
 化

(一) 出荷統制ノ一元化ノ徹底、小口買出、小口輸送ノ
 禁止、高級料理店、待合等ニ対スル配給ノ制限、
 外食ノ整理、中央地方配給機構ノ整理統合ノ
 徹底的実施等)

(三) 尚水産業ニ関シテハ前各項中該当事項ノ外

- 1. 漁業ノ整理、共同生産ノ促進
 - 2. 沿岸内水面養殖ノ徹底的拡充
 - 3. 木炭ガス船及帆船ノ普及促進ヲ図ルコト
- (四) 各種消費統制ノ強化

1. 玄米食ノ奨励、甘薯、馬鈴薯等ノ混食ノ増加、綜合食糧切符制及ノ実施研究

2. 商取引其ノ他經濟界攪乱行爲ニ対シ嚴重ナル処置ヲ为スト共ニソノ原因除去ニカムルコト

3. 奢侈的營業ノ自発的整理ノ慫慂ト国民ノ生活刷新運動ノ展開(差シ当リ大政翼賛会ヲシテ国民運動タラシメ、ソノ商ノ情况ヲ注視シツツ自肅

不徹夜ノ矣。アラバ大作戰ノ開始ト同時ニ強権ノ發
動ヲナスベク予メ政府ニ於テ用意シ置クコト
々、電力不足ニ對シ事業ノ軍事的ニ重要者ニ充テ
ル消費規正強化ヲ斷行スベク之ガ準備ヲ支
（工場別調査、規正強化ニ伴フ措置石炭消費
予想）

七、物動、勞務、生産拡充、~~本債消化~~^{資金}

- <一> 軍需生産増強示女員會、結成及業務、進行
- <二> 昭和十七年度物動計画、改訂
- <三> 昭和十八年度物動概略案、作成
- <四> 昭和十七年度~~物動~~^{勞務}動員計画、改訂
- <五> 昭和十八年度~~物動~~^{勞務}動員概略案、作成
- <六> 昭和十八年度生産拡充計画案、作成着手
- <七> 銅、鉄、鋳等、一般回收及特別回收、徹底実施ニ
関スル施策ヲ準備ス
- <八> 平和産業及非能率工場、休止又ハ合併ニ関スル
施策ヲ準備ス

<九> 鉄鉍、石炭、アルミニウム増産緊急対策 別紙

<十> 企業再編成、促進強化

<十一> 統制會、育成強化（第二次權限 ^委 移讓等）

<十二> 物資回收、徹底化

<十三> 化學工業、機械工業、高度化

<十四> 大東亜交易營團設置

<十五> ^{物資配給の決定ト} 公債消化及貯蓄増強対策、徹底

<十六> 軍需生産増加、夕メ豊永期（上半期）深夜電力ヲ

利用スベク、ソレニ伴フ資材、勞務等、手當ヲナス

八

八 輸送力強化
關係當局ノ聯絡強化ヲ計ル

(六) 生産拡充計画(工場建設)ト電力計画ト一致セシムルヤウ

(五)

(七) 船舶ノ新規徴用予定ニ應ジタル本年度ノ第四半期ノ

輸送計画及配船計画ヲ再檢討ス

(八) 船舶運航ノ能率ヲ向上セシムルタメ左ノ措置ヲナス

一 船舶運營會ノ人的強化

二 港灣作業會社ノ設立促進

三 夜間荷役ノ實施

四 一人夫ノ徴用實施

五 一人夫ノ固定給支拂制確立ト荷役出来高拂二

ヨル割増制度ノ實施

以上

(三) 陸上輸送対策

(1) 沿岸海運物資、可及的陸運轉嫁

之加為在、方策ヲ行フ

1. 幹線、緊急改良 = 依ル輸送力強化。

2. 計畫輸送、徹底

3. 荷役能力、増強

4. 不急輸送、抑制

(2) 1. 運送能力、急遽整備

2. 代燃車、増加

3. 荷役能力、増加

(3) 補修資材、確保

九、勤勞組織ノ改革

重要産業ニ於ケル男子勤務員(經營者ヲモ含ム)全部ヲ徵用之之等應徵勤務員ヲシテ公的身分ヲ國家ト保有益ニ軍隊的規律ニ依ル組織ヲ強化シ以テ勞動能率ノ劃期的増進ヲ圖ル之ニ要スル法制的措置トシテ應徵勤務員ノ給與ヲ國家ニ於テ支給スルニ必要ナキ法律並ニ服務、練成、給與、賞罰ノ國家性ヲ明確ニ規定スル勅令(應徵勤務員令)ヲ至急制定ス尙徵用工員ニ對シテハ食糧ノ増配ヲ考慮ス

(參考) 應徵勤務令ノ内容

- (一) 厚生大臣ハ重要事業場ニ於ケル勤務員(社長、工場長等、企業經營者ヲ含ム)ノ全部又ハ男子勤務員ノ全部ヲ徵用シタル場合ニ於テ其事業場ニ對シテ應徵團ノ設置ヲ命ジ得ルコト

(五)

石炭企業ニ關シテ

(一) 應徵團ヲ設置シタル事業場ニ於ケル全應徵員ハ應徵團ニ
屬スルモノトスルコト

前項ノ應徵員ヲ應徵勤務員ト稱スルコト

(三) 應徵團ハ政府ノ命スル所ニ從ヒ當該事業場ノ業務
ヲ遂行スルモノトシ、應徵勤務員ハ應徵團長ノ指揮
ヲ受ケ相當業務ニ從事スルモノトスルコト

(四) 應徵團長及各級幹部ハ厚生大臣之ヲ任免スルモノト
スルコト

(五) 應徵勤務員ハ政府ヨリ一定ノ給與ヲ受ケルモノトシ、特殊
公務員タル身分ヲ有スルモノトスルコト 財源 企業主ヨリ納付

(六) 應徵勤務員ノ服務、鍊成、保護ニ関シテハ厚生大臣ノ任命
スル停務監理官之ヲ定ムルモノトスルコト

(七) 服務ニ違及シタル者其他上級應徵勤務員ノ命ニ及シタル者ニ對シテハ戒告ヲナシ改メザルトキハ三月以下ノ徵役ニ處スルコト

(八) 應徵勤務員ニ對シテハ其ノ身分、前歴、年令等ヲ考慮シ國家ヨリ相當ノ待遇ヲ與フルコトヲ得ルモノトスルコト

(九) 國民徵用令ノ規定ニシテ本令ト牴觸スルモノハ應徵勤務員ニ適用セザルコト

一、 勤勞配置ノ統制強化

(一) 新作戰ニ伴フ軍勳員ニ依ル勞務者ノ不足ヲ充足スル爲左ノ措置ヲ講ズ

一、 既定計畫ニ基クモ、以外ニ新規徵用一六〇〇名

2. 一部男子學生生徒（技術方面ヲ除キ且專門校以上）

三八〇〇〇名ヲ徵用類似ノ形式ニ依リ生産部面ニ轉用ス
3. 停務ノ利用（一月中ニ六〇〇〇名）

(三) 勤勞報國制度ノ擴充

國民勤勞報國協力令ヲ改正シ期間ヲ九〇日ニ延長ス
此ト共ニ四月以降勤勞報國隊ニ依ル女子ノ大量勤
負ヲ行フ爲メノ準備ヲナス（女子ノ徵用ハ未ダ行ハズ）

士 技術、動員

(一) 徹底的士生產擴充、為一生產技術、飛躍的
向上

(1) 重要工業、生產技術現狀、調查能率診斷
班、派遣

(2) 技術的見地、甚至夕綜合轉政策、樹立

(3) 規格型式、再檢討設計方式、再吟味

(4) 生產技術者、應急增強對策

(二) 現段階、於一緊急必要兵器資材、即急
完成

(三) 軍其他、要望、即應、官民諸研究成果

徹底的動員

- (2) 一般科學技術者其他，創意，徹底的動員
- (3) 把軸國上，技術的連絡及び中立國等ヲ
通シテ，技術謀報實施

(三) 大東亞共榮圈ニ於ケル綜合技術政策ノ
即急樹立

(1) 共榮圈内資源生産設備，技術的見
地ヨリスル再調査

(2) 技術的見地ヨリスル右ノ最大能率ヲ發
揮方策樹立（南方過剩物~~發~~資，
能率の利用等）

(3) 新作戰 = 即 應 以 技 術 的 見 地 予 以 行 之

(4) 新 開 發 計 畫 之 樹 立 (技 術 者 巡 邏 準 備)
共 同 圈 內 各 民 族 之 技 術 的 利 用 方 策 樹 立

(四) 其 他 一 般 方 策

(1) 各 級 技 術 者 之 志 意 增 員

工 理 工 科 系 大 學 專 門 校 之 擴 充 (二 部 教 育)

官 方 技 術 師 民 間 技 術 者 之 利 用 (兼 收 陸 海 技 術)

口 熟 練 工 業 要 技 術 者 之 召 集 解 除 陸 海 技 術

短 現 將 校 等 之 能 率 的 利 用

生 產 工 場 之 放 寬 下 級 技 術 者 之 志 意

教 育 之 徹 底

(2) 各省研究機關、調査綜合重上莫目標三

ニル運管

技術中核機肉タル技術院、拡充強化

土 新占據地域、統治

新占據地域統治方式並ニ次頁源由究

取得ニ関スル調査研究並ニ備

軍票印刷準備並ニ印刷開始

十三 後合対策

(五)

機密

今後ノ戦争指導ニ關スル件（政府案）

一、帝國ハ速ニ萬難ヲ排シテ必勝ノ長期國家力戰態勢ヲ確立シ密ニ獨伊ト提携シテ積極且主動的ニ戰略態勢ノ強化ヲ圖ルト共ニ隨時隨所ニ敵ノ反攻企圖ヲ破摧シ以テ大東亞戦争ノ完遂ヲ期ス

二、右目的達成ノ爲隨時左記施策ヲ行フ

- (1) 有利ナル戰略態勢ノ確立竝ニ國土防衛ノ爲對G J作戰ヲ實施ス
- (2) 對G作戰達成頃Xト共同シテN X連絡ヲ確保スヘキ方策ヲ講ス
Xヲシテ右ニ懸シ得ル域作戰指導方施策セシム
- (3) Dニ對シテハ萬一ニ備フルモ極力開戦ヲ避ク、但シAノR使用ニ對シテハ嚴重ナル警戒ヲ行フ
- (4) X D戰調停ノ手段ヲ講シXヲシテ主力ヲ以テB攻略ニ專念セシムルニ方途ヲ策ス

獨逸トシテハN/D攻勢ヲ要請スルニテハヤ
之ニ對スルNノ態度。Dが前停士未レハL
攻勢ハあるとせん

内野

間野所負



機密御書六號附ノ四

第百八十一通第百四十四回

十二月二十五日(想定)

「議會ハ一月十日再開、二月十日マデニ議事ヲ了シ爾後休會スルコト」
ニ政府ト議事トノ意見ノ一致ヲ見タリ

機密

大本營政府連絡懇談會申合事項

本御前會議決定ニ基キ

一、大本營政府ニ於ケル宣傳ニ關スル緊密化

情報局總裁ノ連絡會議出席

作戰上許容シ得ル限り戰況ノ真相發表等ニ伴フ現段階ノ重

大時局ヲ認識セシム

二、A B O 船舶運營及物資配給時機等ノ緊密ナル協力ノ下ニ於ケル生産

増強

右ノ爲所要ノ連絡機關ヲ常備ス

三、對獨強力特派使節ノ派遣

四、情勢切迫ニ應ジ對中立國（亞智）武力示威

英國民意識ノ昂揚ト生産ノ急速増強

理由
理由
理由
理由
理由

150
150
150

（X）ノ我軍揚子江ノ大方針決定者ハ、H.ナリ、胡。H.ト出止人
一九四三年秋ニ待テ「トイコトヲ」モ又



一等方針 真相、普及

○宣傳啓蒙、眼目

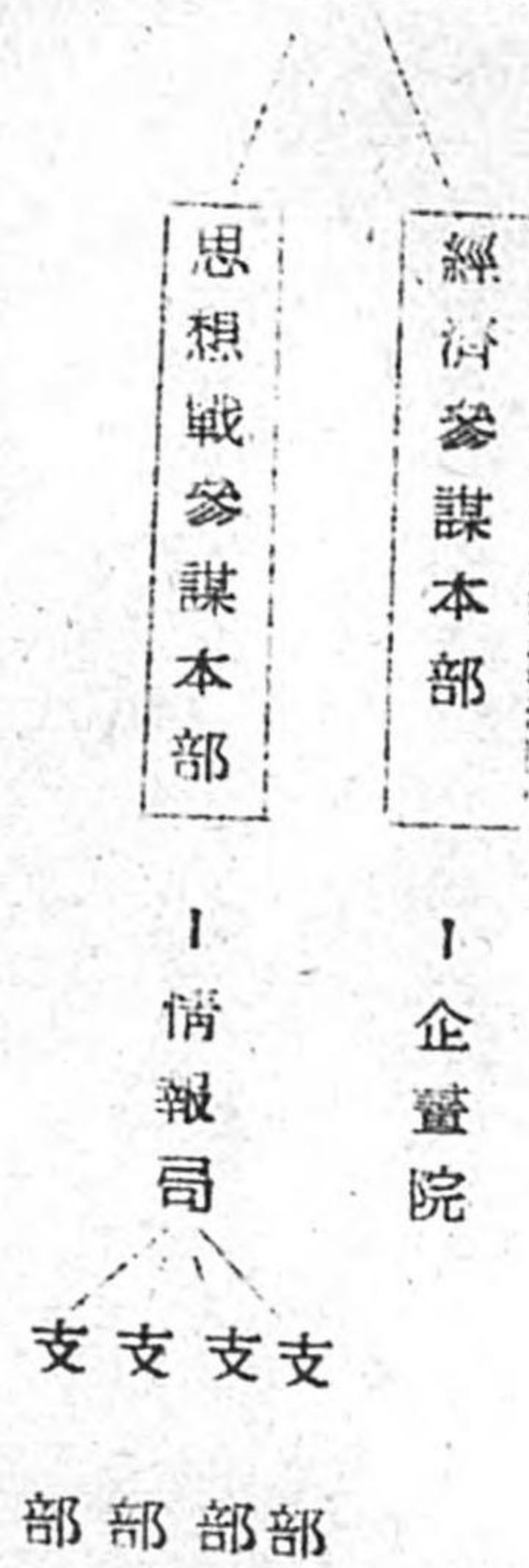
向野

- 1、戰爭目的、徹底及敵、戰爭目的、攻擊
- 2、悲觀論、撲滅（特ニ對イソ工作）
 コ、爲戰後、世界新秩序、構想ヲ至急明確ナラシム。
- 3、外交施策ノ線ニ沿ウテ對D對J對X對中立國及對法王囑、方策樹立
- 4、南方占領地ニ對スル責任分擔（應能協力）、宣傳
- 5、A D 離間工作
- 6、防空、國民生活切下ゲ、認識徹底、並ニ近代航空戰通商破壞戰、實相闡明經濟事情
- 7、新聞雜誌、再編成

△情報局改組案

大本營政府連絡會議

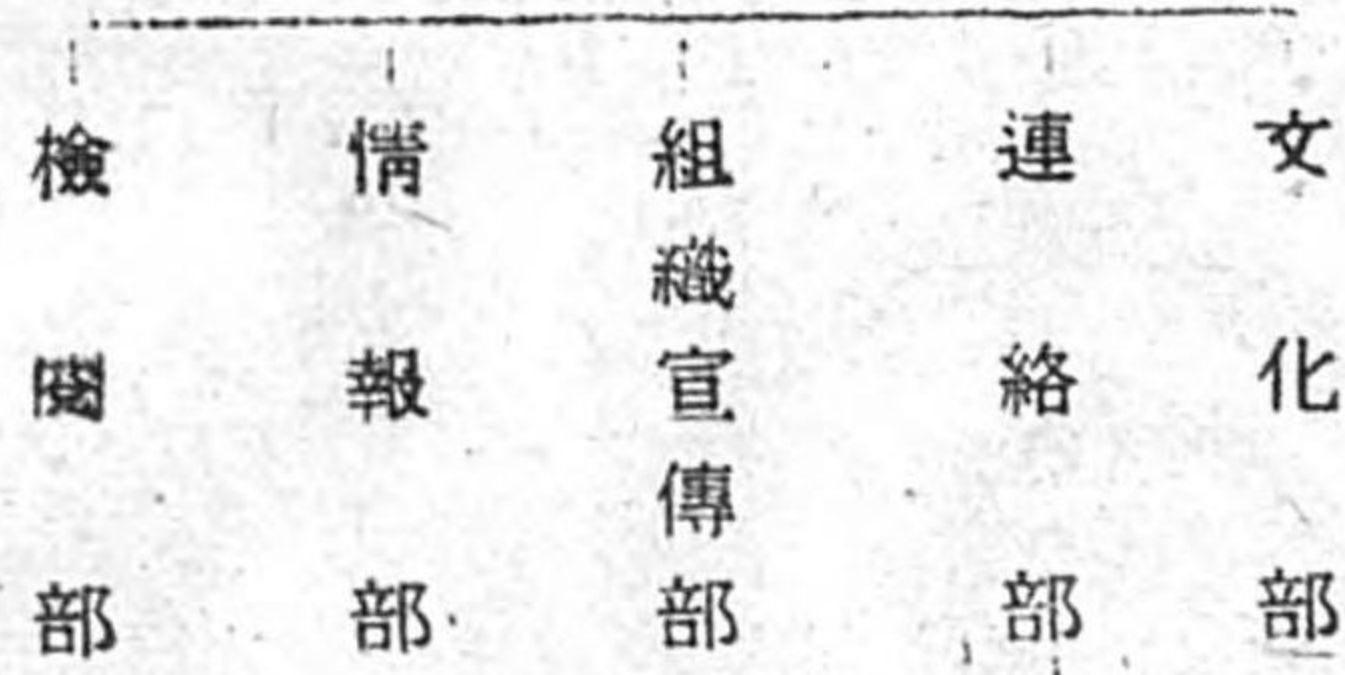
戰爭指導機構



- (一) 右、如ク情報局、性格ヲ一變スルタメ情報局總裁ハ企畫院總裁ト相並ンデ「常時」連絡會議ニ出席スル要アリ
- (二) 閣議決定、上總理大臣及軍部兩大臣ヨリ統帥部ニ懇談、上決定スルコト必要ナリ
- (三) 眞相、發表等モ連絡會議ニ於テ總裁ヨリ統帥部ニ其旨ヲ要求懇談ス

○ 單ナル私案

總裁 | 次長 |



組織宣傳部 | 宣傳院 | 宣傳員ヲ養成ス

情報部 | 各在外大使館ト連絡ス

○宣傳中隊ノ編成一情報局

軍隊組織ニ準ズル命令系統ヲ設ケテ各職域ニ統一的ニ運動ヲ展開ス
獲得スベキ對策ハ例ヘバ

翼壯、產報、郷軍幹部、文化人及ソノ組織
生産面ノ責任者、學校教員及大學生

○十二月八日

一、首相陸海外相ヨリ國民ニ訴フラヂオ演說

二、翼贊會副總裁司會、下ニ全國一齊ニ聖戰完遂國民大會ヲ行フ

○十二月廿五日 香港陷落記念日

一、翼贊會主催ニテ對日敵憤心、昂場ヲ行フ

○一月一日

○4 A 電降伏ニ際シ元旦ノ辭ヲ兼ネ首相ヨリマイクヲ通ジテ全國民ニ告グ

我々の他、
他の、
もの

内容 聖戰第二年、戰局ノ深刻ナチ述ベテ國民ノ奮記ヲ促ス。

眞珠灣以來、浮薄ナル戰爭觀、一掃：

○勤勞ニ對スル國家的、褒賞制度、樹立
具體的優遇

(此ニリヒク、アルトメトス)

おれの子供を、おれの子供を

○隨時各級各部門指導者ヲ招致シテ帝國ノ現段階ノ真相ヲ説明徹底セシム。

議會 對策

内閣

議會再會勢頭行フ總理大臣ノ施政演說内容

一、内閣ノトルベキ政策ヲ相當具體的ニ説明ス

二、我國現状ノ真相ヲ國民ニ徹底セシメ之ガ爲相當機微ニ亘ル點迄述べテ國民ノ奮起ヲ促ス、但シ對外關係ハ考慮ス

三、大東亞戰爭ノ現状ヲ述べ既ニ決戰的段階ニアルコトヲ強調シ、眞珠灣以來ノ國民ノ浮薄ナル戰爭觀ヲ一掃スルコト

四、右ノ決戰遂行ノ爲メニハ國民總力ノ結果ヲ徹底的ニ要スベク國民一般ノ協力情況ニ於テ不徹底ニナルトキハ必要ニ應ジ強權ヲ發動セザルベカラザルニ至ヤモ知レズ政府ハ之ガ用意ヲモ充分ニナシ置クコトヲ要ス

五、世界史ノ必然カラ戰爭ノ前途ニ光明アルコトヲ知ラセル、米英側ノ戰爭目的ノ矛盾ヲ暴露

六、東亞諸民族ニ對スル呼ビカケ（責任分擔）

X、内閣

七 占領地ノ狀況

八 會期ハ與政トノ打合ノ上最短期間トス

九 大臣ノ出席モ特定ノモノニ限定シ議員ノ八日長ヲ主トシ對内外

ノ宣傳效果ヲ的フ

十 議事進行ヲ簡易ニス

統監部

武力戰審判部

外交戰審判部

思想戰審判部

經濟戰審判部

第二期演習處置書 其ノ一

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ
通知先

總裁

提出時

（想定）昭和十七年十一月
（實曆）十一月二十八日時刻一七、〇〇

提出者

（演習官名）

翼賛會副總裁
井上勝英

大政翼賛會ノ実施スベキ行事

一、大詔演說一周年記念式

十二月八日

於中央式場 日比谷公會堂

地方式場 全口各映画劇場 學校講堂

二、口民生活刷新運動、展公南

三、中央協力會議、南催

十二月二十五日

總力戰研究所

統監部

武力戰審判部

外交戰審判部

思想戰審判部

經濟戰審判部

第二期演習處置書 其ノ

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ
通知先

首相

提出時
機 (想定)

昭和十年 月 日

十一月三十日時刻 十二時

提出者

文部大臣

(演習官名)

久保田藤麿

文部省所管事項ニ関シテハ
政府ノ根本方針タル國体明徴ノ徹底ヲ期スルハ勿論
更ニ各機關ヲ擧ゲテ國家本位ノ學術ヲ振作シ鍊成機構ノ
強化ト相俟ツテ汎ク學徒ノ報國態勢ヲ固クセントス
右ノ爲 教學教化ノ事業ニ從事スル者並ニ學生生徒ノ自發
的 新活動ヲ促進スルト共ニ延テハ一般社會ノ積極的協力ヲ要
望セラレ度シ

總力戰研究所

統 監 部

武力戰審判部

外交戰審判部

思想戰審判部

經濟戰審判部

第一期演習處置書 其ノ

提出先 統 監 部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ 内閣総理大臣

提出者 (演習官名)

提出時機 (想定) (實曆)

昭和十一年十一月十五日 時刻 一五時

内務大臣 江日確 先生

第八十一議會ニ於ケル總理大臣ノ施政方針ニ關スル事項
 内務省ト特別ニ言及スル事項ニ關シテハ、
 第一、國民的ニ述ヘテ記シイ
 第二、國民的時局ノ重大性ヲ十分認識シ、此ノ際、國家ノ處理ニ
 肉シテハ、士氣ヲ鼓舞シ、或ハハヤフト
 第三、國民生活ノ刷新ヲ計ルニ、先ニ戰爭ノ進行ニ支障アリト感
 ラル、事象ニ就テハ、強權ヲ以テ動スルノ田意ニシテ、ハヤフト
 第四、國民志氣ノ昂揚ヲ計リ、積極的國民運動ヲ展開
 第五、時期ニハヤフト

總力戰研究所

統監部

武力戰審判部

外交戰審判部

思想戰審判部

經濟戰審判部

第一期演習處置書 其ノ

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ

總理大臣

通知先

提出時機 (想定) 昭和十八年 一月 日
(實曆) 十月 三十日 時刻

提出者

內務大臣

(演習名官)

江口 研究生

一、閣取引其、他經濟界攪乱行為ニ對シ嚴重ナル処置ヲナスト共ニソノ原因除去ニカハルコト

一、奢侈的營業ノ自發的整理ノ從心恣ト國民ノ生活刷新

運動ノ展開、(差シ当リ大政翼賛會ヲシテ口民運動

タラシメ、ソノ間ノ情況ヲ注視シツ、自肅不徹底ハ莫ク

ラバ大作戰ノ開始ト同時ニ強權ノ発動ヲナスベク予メ

政府ニ於テ用立思シ置クコト)

一、政府ノ施策ニ對スル及對論及ビ對口肉戰心至ノ議論ハ

ソノ危險ナルモノニ限リ取締ルコト

總力戰研究所

第二期演習處置書 其ノ

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ
通知先

外閣

提出時

(想定)
(實曆)

昭和十一年 十一月三十日 時刻一六三〇

提出者

(演習官)
氏名

農林大臣 伊藤嘉彦

正月行事ノ件 報告

正月行事トシテ左ノ各項ヲ実施ス

(一) 正月用酒(一人当一升一合)、鮭、菓子(キヤラメル

十四支以下一人当一個)配給ノコト

(二) 門松ノ廃止ヲ徹底セシムルコト

(三) 正月早々ノ吉日ヲ選ビテ農林大臣ハ伊勢方矣

宮ヲ爲シ豊作ヲ祈願スルト共ニ名古屋放送局ヨリ全国ニ向ケテ分チ放送ヲ行フコト

統 監 部

武力戦審判部

外交戦審判部

思想戦審判部

經濟戦審判部

第一期演習處置書 其ノ

提出先

統 監 部 武力戦審判部 外交戦審判部
思想戦審判部 經濟戦審判部

報告又ハ
通知先

首相

提出時

(想定)
(實曆)

昭和十 年 月 日
時刻

提出者

(演習官名)

情報局総士武
芥川 典

一月中旬迄ニトルベキ處置

十二月八日 開戦一周年一般行事

(一) 旗掲揚

全口各戸(官公衛、女子校、工場、倉庫)

ヲシテ一斉ニ口旗ヲ掲揚セシム(午前七時—午後五時)

(二) 黙禱新念

午前十一時五十九分ヨリ正午迄一分

間、出征兵士ノ武運長久ヲ祈禱シ、其門ノ英靈ニ對シテ感謝スル意ヲ込メテ黙禱シ、神明ニ新念ス

(三) 大詔奉読

官公衛、學校、団体、会社、工場

總力戰研究所

内記
左記

統監部

武力戰審判部

外交戰審判部

思想戰審判部

經濟戰審判部

第二期演習處置書 其ノ

提出先

統監部 武力戰審判部 外交戰審判部
思想戰審判部 經濟戰審判部

報告又ハ
通知先

外閣

提出時機
(想定)
(實曆)

昭和十年 月 日

提出者

(演習官)
氏名

曲辰林大臣
伊北藤嘉加彦

正月行事ノ件 報告

正月行事トシテ左ノ各項ヲ実施ス

(一) 正月用酒(一人当一升一合)、鮭、菓子(キヤラメル)

十四支以下一人当一個)配給ノコト

(二) 門松ノ廃止ヲ徹底セムルコト

(三) 正月早々ノ士口日ヲ選ビテ曲辰林大臣ハ伊北力矣

宮ヲ爲シ曲辰林氏ヲ新頭スルト共ニ名古屋放送

局ヨリ全國ニ向ケテヲ行フコト

總力戰研究所